



第八回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

応募総数

小学生の部 176作品

中学生の部 818作品

審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

種が落ちて来た

角野 栄子

何かが目に止まって、はっと心が動くことがあります。多分その時、何かの種がその人に落ちた時なのでしょう。そんなことを考えながら、応募作品を読ませていただきました。この作家にはどんな種が落ちて来たんだろう。すると、作品の向こうに作者の顔が見えてくるような気がします。楽しい時間でした。

小学生部の大賞、鏑木邦賢さんの「アカゲランション」、僕が作ったマンションが代わりがわり小さな動物の住処になっていく、その空間の温もりに浸りました。でも、この作品は可愛さばかりでなく、自然が持っている豊かさをしっかりと感じさせてくれました。

入賞、松田薫さんの「ぼくのおにいちゃん」、塚田夏帆さんの「おとうとおにいちゃんになる」二作品とも、兄弟のことが書かれています。仲良し兄弟が目に見えるように表現されていて、見事でした。

中学生の部の大賞、片岡真緒さんの「春の海」は、思わず涙ぐんでしまうような優しさを感じました。誰でも、この道を通っていくのです。こんな静かな優しさの道であって欲しいと思いました。おばあさんも素晴らしい生き方をしているから、こんな美しい詩が生まれたのでしょうか。

入賞、鳥居ゆりさんの「ヒロシマ」。ヒロシマを訪れた時の気持ちを真っ赤と言う言葉で表現されていて、臨場感がありました。もう一つの入賞作品、根岸煌太郎さんの「拾った猫」は、猫とはこう言うおつき合いがしたいものです。飼っているのではなく、飼われているのでもない。一緒に暮らしている大事な仲間ですものね。

来年もたくさんさんの詩と出会いたい。応募してください。楽しみに待っています。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「アカゲラマンション」

トキワ松学園小学校2年 鏑木 邦賢さん

ぼくがつくったマンション

ぼくがでていったあと

ヤマネがすんだ

ヤマネがでていったあと

スズメバチがすんだ

スズメバチがでていったあと

ムササビがすんだ

そのうちだれもすまなくなつて

くものすのカーテンがかかった

古くなったマンションは、台風でたおれた

たおれたら虫がたくさんやってくる

みんなのえいようになった

やくにたつぼくのマンション

中学生の部 大賞 「春の海」

筑波大学附属中学校3年 片岡 かたおか 真緒 まおさん

私の祖母は

海に沈んでいつている

祖母は毎日

朝早く目覚め

朝日がうすぼんやり光る庭で

草花に水をふらせる

みずみずしいサラダを食べ

金色のバターをトーストに塗る

一日も欠かしたことのない

化粧をして

おもい赤色の口紅を

筆でつける

大きな家を一人で掃除し

小さなほこりをぬぐう

そしてお茶を飲んで

ふと

財布と通帳が無いことに気がつく

母に慌てて電話をかけて

「どこにやった」

と叫び怒る

そしてしばらくして

落ち着いて

忘れる

夕方にはウォーキングをして

家に帰ると風呂に入り

小さなコップに梅酒と

形の良い氷を入れる

そして寝る前

私は電話をかけ

祖母は三回名前を間違えて

やっと私の名前を呼ぶ

その声は優しく

あたたかく

守ってあげたくなる

三回目の昨年のピアノの発表会の話

祖母にねだられながら

願わくば

このまま祖母が

春のおだやかな海に

美しく微笑みながら

沈んでいくかのように

私を忘れてくれるように

と思った

小学生の部 入賞

入賞 「ぼくのおにいちゃん」

鎌倉市立富士塚小学校1年 松田 まつだ 薫 かおる さん

ぼくのおにいちゃんは

さんすうがとくい

よくあかい

トマトときくとウエツという

ぼくのバッグをもつてくれる

おもしろくらびをつくる

ごはんのときラーメンだとはやい

おにいちゃんがおこられてるとき

おにいちゃんのかおはいいいあしていい

おこづかいをもらったとき

ちやりんちやりんといってわらう

たまにおさつをもらうと

ペラペラといってわらう

やっぴりよくあかい

ぼくたちがねるときじゃんけんをする

それは

ねるぼしよをきめるためだ

いいぼしよをゆずってくれたことは

いっかいだけある

れいぞうこのきゅうにゅうは

ぼくにとらせると

このなつおにいちゃんはトマトをたべた

ラーメンほどではない

入賞 「おとうとおにいちゃんになる」

鎌倉市立山崎小学校2年 塚田^{つかだ}夏帆^{かほ}さん

わたしのおとうと、

わたしが四さいの時にうまれてきてくれた。

小さい時から、

すべりだい、

かくれんぼ、

かいじゅう(ごっこ)、

たくさんあそんできたなあ。

わたしのおとうと、

いつもわらっている。

いつもうたっている。

でも、

すぐに大きすぎてなく。

すぐにいじげる。

すこしだけうるさいなあ。

わたしのおとうと、

いつのまにか、

かいだんを一人でおりにている。

くつ下を一人ではいている。

でんきを一人をつけている。

ちよっとだけかなしいなあ。

わたしのおとうと、

もうすぐ四さいになる。

わたしのおとうと、

もうすぐおにいちゃんになる。

あんなに小さかったおとうとが、

おにいちゃんになるなんて、ふしぎだなあ。

大切なわたしのおとうと、

おにいちゃんになっても、

ずっとわたしのおとうとでいてね。

入賞 「ごほんのうた」

精華小学校2年 塚原 卓也さん
つかはら たくや

ごほん

ふりかけ かけますよ

じつと してらてくたさる

ういへと

ふりかけ

ごほれるよ

ごほん

おたぎり ごちのますよ

あんしん してらてくたさる

びりりこたひ

ごほれるよ

ごほん

おへちへ はごのますよ

おとなしくしてらて

あはれるよ

もつたいないよ

入賞 「雨とぼく」

鎌倉市立腰越小学校2年 松本 匠生さん
まつもと たくみ

ぼくは、雨のおいを知ってるんだ。

雨のおいは、コーヒーのおい。

あまくて、すっきりして、いいにおい。

雨のおいは、プールみたいなにおい。

バシバシバシやおよぐぼく。

つめたくて、きもちいい。

雨のおいは、春のおい。

ふわふわとみどりの、よもぎのおい。

雨のおいは、田んぼのおい。

ゲゴゲコかえる、チャポンとダイブ。

ぼくは、あめのうたを知ってるんだ。

ぼたんぼたん、ズー、ザー、ドドッ、トゥイン、チャンチャン、ギツギツ、ポン。

雨がうたをうたったら、ぼくは、そとへ、とび出すんだ。

雨とおにごっこしてかくれんぼする。

うたにあわせてぼくは、とぶ。

雨にぬれたらきもちいいんだ。

だからぼくは、雨がすき。

入賞 「わたしの気持ち」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校3年

石多^{いした} 奏彩^{そあ}来^らさん

わたしが、おこる時

頭の中は、赤と黄色と青色になる

おなかの中には、車のガスがたまる

だから、思いきりジャンプをする

わたしが、笑う時

頭の中は、赤とピンクと白になる

おなかの中に、ハートができる

だから、ほっぺが赤くなる

わたしが、かなしい時

頭の中は、青と緑と、とうめいになる

おなかの中は、海になる

だから、なみだがポロポロ落ちる

わたしが、おどる時

頭の中は、虹色と銀色と金色になる

おなかの中には、流れ星がとんで、お花が咲く

だから、わたしは、キラキラ光る

入賞 「ニュースが面白い」

蒲郡市立三谷小学校4年 鈴木^{すずき} 幹太^{かんた}さん

「新しい元号は、令和です」

「深層崩壊」「地震」

「殺人事件」「銃乱射」

ぼくは、四年生になってから

ニュースの面白さを知った

漢字がどんどん読めるようになって

テレビに映っている文字がどんどん頭に入ってくる

「えっどういう意味」

「これは、どういうこと」

次から次へと不思議がいっぱい

ワクワクが止まらない

分からない言葉、意味、読み方があると、

すぐお父さんやお母さん、おばあちゃんに聞く

お母さんに聞くと、

「かっかも分からなくて、辞書で引いてかんちゃん教えて。」

とめんどくさそうに言う

お父さんに聞くと、

「こうだね、ああだね、これはこういう意味なんだよ。」

とすぐくていねいに教えてくれる

おばあちゃんに聞くと、

「かんちゃん、一緒に考えてみよっか。」

と二人で話し合う

この日本には、どれだけの漢字や言葉があるのだろう

同じ言葉でも全くちがう意味があったり、

漢字一つでも読み方がたくさんあったり、

考えただけでワクワクする

でも、今まで分からなかったことも分かってくるから

すごく悲しいニュースもいっぱい分かってしまう

とても辛い気持ちになる

全部楽しいニュースならみんな幸せな気持ちになれるのにな

今日も

「猛暑」「熱中症」「台風接近」

テレビに映る漢字を見ただけで、

ぼくは暑くなってくる

もっともっと色々な漢字、言葉を知りたいな

慣用句、四字熟語もいっぱい覚えたい

全部知れたらすごく楽しそう

またワクワクが止まらない

入賞 「家族でほえる」

蒲郡市立三谷小学校4年 鈴木 瑠乃さん

「モー」

が、わたしの口ぐせだ。

「モー」

パパも、これが口ぐせだ。

そういえば、わたしとパパ、うし年だ。牛のなき声って

「モー」

じゃん。だからか。

ママは、

「いいかげんにして。」

「早くして。」

「部屋のそうじをして。」

とか、毎日ほえるんだ。

そういえば、ママ、いぬ年だ。犬って、

「ワンワン」

「キャンキャン」

「ザー」

って、ほえてるじゃん。だからか。

弟は、たつ年だ。たつって、どんななき声なんだろう。実ざいしない動物だから、なき声かわからない。

そうだ。弟の口ぐせをたつのなき声にしちやえ。

「もうやだ。」

これを、たつのなき声にしよう。

「もうやだ。」

と、ほえながらとんでいるたつを想ぞうすると、笑えちやう。

たつって、こわいイメージだけど、

「もうやだ。」

と、ほえていたら、なんか、かわいいかも。
弟と、一緒だ。かわいいもん。

入賞 「いいにおい」

清泉小学校5年 田村 白百合さん

ふわん ふわん

いいにおい

何のにおい

ハンバーグのにおい

お父さんとお兄ちゃんは大きく

私とお母さんのは中ぐらい

弟のは小さい

こんがり焼けた おいしいにおい

ふわん ふわん

いいにおい

何のにおい

洗たく物のにおい

それは 太陽と風と洗剤のにおい

タンスの奥から出した服は

なつかしい 前の家のにおい

色んな思い出あふれ出す やさしいにおい

ふわん ふわん

いいにおい

何のにおい

弟のにおい

公園の草むら

お古の自転車

目を閉じると

キーコキーコ 音まで聞こえる

色とりどりの 小さい子のおい

ふわん ふわん

いいにおい

何のにおい

お母さんのおい

頭のとっぺんから 足の先まで お母さんはいつもお母さんのおい

同じシャンプー使っても 何だかちがう

生まれてからずっと 私が一番好きなおい

入賞 「雲と空とこの世界」

鎌倉市立西鎌倉小学校 6年 富川^{とみかわ} 舞美^{まみ}さん

不思議な雲を見た

車の窓のすきまから

紫と青が混ざった山のような雲の下には

氷河のように真つ白な雲がたくさんあった

私のなぜかしめつけられた心とは裏腹に

碧い碧い爽快感あふれる澄んだ色の空は

ずっと続いていった

どこまで続くのだろう

それはきつと

世界の果てまで続くはず

雲はどうして生まれたのだろう

空はどうして生まれたのだろう

そしてそして

宇宙はどうして生まれたのだろう

大空の謎

雲の運命

めずらしい雲を見た

あるホテルの窓から

逆さの人間雲からは

S字のすじ雲がたなびいて

そのとなりには入道雲

だんだん人がゆがんでいく

人はどんどん変わっていった
ハロウィーンのかぼちやの
目と口みたいになってきた
やはり今日も
空は碧く広がっていた

朝

また窓をのぞくと
雲か霧か分からないものが
遠くの山々の輪郭をなぞり
ぼやけさせている
カーテンを閉じた
そのすきまからは
まばゆい光という光が射し込んでいた

入賞 「祖母の子守唄」

沖縄カトリック小学校6年 比嘉門 夢さん

ひがじょう

ゆめ

私の祖母は年を重ねた

一日の大半を

お気に入りのいつもの場所で

穏やかに過ごしている

母が祖母のお世話をしていると

『いつも「親切にありがとうございます。」をいいます。』

「どちら様でしょうかねえ。』

とのぞきこむ 祖母

母はお世話の手を休め、

『わたしは昔あなたに

ずいぶんお世話になったんです。

これくらい なんでもありませんよ。』

いくらなんでも

母を気の毒に思っていた

ある日

母が風邪をこじらせ

ソファで横になっていた

めったに立ち上がることのない祖母

そろり そろり

その手には

祖母のひざかけ

母にかけると

いとおしそうに 子守唄

母のことを娘だと分からないはずの祖母

ふと母を見ると

つぶつたまんまの目から 涙

その日 その時

祖母は母の母に戻っていた

気がついたら 私も泣いていました

中学生の部 入賞

入賞 「ヒロシマ」

南山学園南山中学校女子部1年 鳥居^{とりい} ゆりさん

ヒロシマへ行った

お母さんに行った

真夏の真っ赤な太陽の日に行った

熱波が皮膚をジリジリ焼きつける

皮膚は赤くなりチクチク痛みが増してくる

もっと痛くなれ、もっと赤く肌を焼きつくしてしまえと思った

この痛みを忘れないように

そして、忘れない人になれますように

真っ赤だね

空に浮かぶ

太陽は

真っ赤だね

お店で売ってる

赤いりんご、でも

ある時、ほんの一瞬で

空も街も人も

みんな真っ赤になっちゃった

真っ赤になった街からは

叫び声、泣き声

それしか聞こえない

歓声は、一声も聞こえなかった

入賞 「拾った猫」

慶應義塾普通部1年 根岸ねぎし 煌太郎こうたろうさん

青い目の小さな子猫を拾った

メス猫だよと若い獣医さんに言われた

ふるえる猫を見て

「一生大切にするよ」

と言った

あれから三年

お前さあ

目、茶色くなったなあ

お前さあ

男だったんだな

お前さあ

となりの家の犬より太ったよな

お前さあ

原稿用紙の上で転がったら詩が書けないだろ

お前さあ

長生きしろよ

入賞 「僕」

京都教育大学附属京都小中学校第8学年 石崎^{いしざき}悠也^{ゆうや}さん

僕には 形がない

僕は 僕を 見られない

僕は 僕に さわれない

僕は 僕を 感じられない

でも あなたは 僕を見られる

でも あなたは 僕にさわれる

僕は あなたによって 形になる

あなたは僕を感じる 僕はあなたを感じる

あなたがいて 僕が生まれる

僕には 形がない

僕は 僕を 見られない

僕は 僕に さわれない

僕は 僕を 感じられない

それでも 僕は生きている

それでも 僕は生きていける

一瞬一瞬 新しいあなたと出会いながら

入賞 「正座の理由」

京都教育大学附属京都小中学校第8学年 奥村 優月さん
おくむら ゆづき

今にも雷の音が聞こえそうな夜

突然、言葉の爆弾が落ちてきた

それは私の敵国

「弟国」からであった

「弟国」は泣き虫で弱い

毎回泣かせて、

勝負に勝ってきた

でも最近「弟国」は

言葉で攻めてくる

今回の戦争内容は

食料の奪い合いであった

「弟国」は言葉の爆弾を落とし

私の国も負けず反撃する

こんな結着がつかない勝負は

初めてかもしれないと思うほど

長かった

ゴロゴロ

雷が落ちてきた

その瞬間、目の前に

鬼がやってきた

「鬼」というものは

世の中で一番怖い

私達の目の前に

雷がうつっていた

どうしてこうなったのか

分からない

が、私と弟が正座で

座っていた

そして

母から鼻歌が聞こえるのは
なぜだろう。

入賞 「滑舌が悪い人の葛藤」

茨城大学教育学部附属中学校2年 塩畑しおはた 龍之介りゅうのすけさん

僕は、滑舌が悪い。

そう言われる。

会話をしても、会話をしても、みんなから、

「何を言っているのか分からない。」
と言われる。

僕は、たまに苦手になる。

自分の意見を人に伝えるのが、

僕は、たまに苦手になる。

自分の思いを人に伝えるのが、

何度も聞き返されてしまい、

みんなの迷惑になってしまうようで…

だから、伝えるのを止めてしまう。

個性なのか。欠点は、

個性と言えるのか。僕の滑舌は、

僕の滑舌は、僕の弱点そのものなのか。

欠点を受け止める事は、

人は常に同じでは無いと知ることなのか。

だったら僕は、

他人の弱点を受け止めたい。

他人の欠点も好きになりたい。

自分の滑舌は努力で治るか分からないけど、

みんなの個性を認める努力は出来るから…。

滑舌の悪い僕のことを、

僕自身が嫌いにならない為に…。

入賞 「闇よ叫べ」

作新学院中等部2年 坪内 花凜さん
つぼうち かりん

身も心もボロボロ。

『あなた』のせいでー。

私は灯火一つ絶えるまで、

記憶の泡におぼれる。

『あなた』が私を、

見えない凶器で刺していることも知らず、

幸福をかみしめている間、

どんなに悔やみ、もがき、苦しみ、

無力な私を自分自身で殺していただろうか。

毎日、毎日、

『あなた』や『あなた』の使い魔に、

いつ襲われるかおびえ、

孤独な戦場に独りぼっち―。

“負けてたまるか”

私は負けない。

強いだけじゃない。

人の弱みも理解した、

『人間』になる。

入賞 「空き地」

大阪桐蔭中学校3年 服部 遼平さん

何百回と通った

場所

何千回と足跡をつけた

場所

何万回と投げた

場所

それなのに

何も知らない人に

僕を知らない人に

消されてしまった

場所

入賞 「兎」

静岡大学教育学部附属静岡中学校3年 福田 芽依さん

めったにみない夢 今日、みたの

真っ暗闇の中

私が、いるの

あたりをみわたすと

白くて丸いモノがいたの

兎だったの

近づくとその兎、不思議なコだったの

目が一つしかないの

たくさんまつげが生えているの

大きくて大きくて大きいの

私、こわくなったの

逃げだしたの こわかったから

追いかけてくるの 兎が

「たすけてええ」

叫んだら 朝だったの

たくさんみた夢 今日も、ミタ

まっくらやみのなか

ワタシが、いる

あたりをみわたせば

白くて丸いモノがいる

ウサギだよ

近づくとそのウサギ、ふしぎなコ

目がひとつしかない

理由なんて ない

ウサギが追いかけてくる

「おかあさん おとあさん」

ウサギが追いかけてくる

追いかけてくる 近づいてくる

私は わたしは ワタシは

ウサギの目にたべられたの

入賞「お腹」

大阪教育大学附属平野中学校3年 森本 匡さん

攻防戦に

息をのんで

9回の表

固唾をのんで

2回戦敗退で

涙をのんで

納得できなくて

言葉をのんで

たっぷり汗をかいて

水をのむ

のんでのんで、のんで

今年の夏も終わる

十五年分のんだ僕のお腹は

まだまだだべったんこで

四十年分のんだ父のお腹は

ずいぶん立派だ

嬉しさ、悔しさ、悲しさ…

必死でのんだ僕のお腹は

どこか誇らしげで

僕自身の生きる糧の証だ。

入賞 『アオ』になる」

智辯学園中学校3年 吉川よしかわ 名美子なみこさん

何と言いませばいいのか。

この世界の全てが青一色に染まれば、不安なんて少しも感じない気がする。

八月十日。

初めて見た海は、

ただ漂っていた。

世界のどこかで

誰かが死んでいくのもおかまいなしに。

誰が言ったのだろうか。

海を見ると自分の悩みなど、

小さく見えると言ったのは。

海は静かに受け入れてくれた。

こんな私を。

静かに、静かに。

ゆっくり、ゆっくり。

海の一部となっていく。

これほど心が落ち着いたのはいつ以来だろう。

このまま、進んでいけそうだ。

今、私に必要なのは酸素じゃない。

この落ち着き以外に何だというのだろうか。

この青以外に何だというのだろうか。

今、私たちに必要なのは海だ。

そんなことを思いながら
海に漂っていた。

これからは思い出していこう。

私が泣く度に、

あのなつかしい潮の香りを。

ただ漂う波を。

どこまでも続いていた青を。

私も海の一部として。